

「わたしの福祉論」 (223)  
春を待ち望む

ソーシャルワーカー 八巻正治

間もなく東日本大震災から十年目を迎えます。その当時、被災地域で生活していた私は、未曾有の大災害を目の当たりにして、呆然とした想いで日々を過ごしていました。そこでこの間の出来事について振り返ってみたいと思います。

大災害が発生した当時、私は調査活動のために南半球のニュージーランドを訪問していました。ちょうど南島のクライストチャーチ市で大きな地震が発生して、何人も日本人が亡くなった直後のことでした。首都のウェリントン市に滞在していた私は現地の様子を勤務先の大学のホームページに掲載するために情報を集めたりしていました。

二週間後にウェリントンを離れ、大災害の当日にはキーウイフルーツの産地であるタウランガという場所にある、高等職業専門学校(ポリテクカレッジ)に設置されている知的制約者たちの継続学習コースや、先住民族であるマオリの文化を継承するための幼児保育機関(コハンガレオ)を見学したりして過ごしました。その後、そこから車で数時間の距離にあるケンブリッジという地域に向かい、親しい友人家族の家を訪問しました。そしてその三日後には日本に帰国することになっていました。

友人宅で過ごしていたときのことです。テレビを見ていた友人が衛星放送から流れてきた大津波の映像に驚いて、私に伝えてくれました。信じられない光景が画面を通して伝わってきました。ニュージーランドでは非核法が制定されているため、国内に原発は存在しません。そのためか原発事故の様子も詳しく伝わってききました。

それから三日後に、日本に帰国するためにオークランド国際空港へ行くのと搭乗手続きに時間がかかりました。聞くと、災害救助チームの人たちに優先的に座席を確保した後一般乗客の搭乗手続きを行うとのことでした。クライストチャーチの地震の時には日本から派遣された災害救助チームの活躍の様子がテレビで紹介されていました。それから二週間後には逆の状況になってしまったのです。

成田空港に到着する前に機内アナウンスがありました。災害派遣チームの代表者が、「クライストチャーチの地震の時には日本の支援チームにお世話になった。今度は我々が日本のために活動します!」との力強いアナウンスでした。それを聞き、思わず涙が浮かびました。

さて成田空港に到着しても交通が遮断されていたため、宮城県に戻ることができず、やむなく数日間、ホテルに滞在した後、とりあえず札幌に向かうことにして羽田空港に行きました。空港は東京から避難しようとする人た

ちで、かなり混雑していました。何人かの人たちに話を聞くと、福島が放射能汚染事故から遠くに逃れたい、せめて子どもや孫だけでも遠くに避難させたい、との緊張した面持ちでした。混雑した中でも皆、整然と並んでいました。

負い目

その後、何とか居住地の宮城県岩沼市まで戻ることができ、さっそく職場に行くのと、皆、口々に地震や大津波の大変さを語ってくれました。それを聞いたたびに震災当日に国外にいた私は、どうにもならないほどの激しい「負い目」を感じていました。と同時に、被災地域で生活するひとりのソーシャルワーカーとして、これから自分は何ができるだろうかと考える日々が続きました。

ご承知のように、自衛隊をはじめとした警察や消防、さらには医療チームの人たちの支援活動には本当に頭が下がりました。被災者さんたちへ温かいご飯の炊き出しをしても自衛官たちはいつもテントの中で非常食を食べていました。各地から派遣されてきた医療職の人たちも避難施設である体育館等の床の上で寝泊まりをしながらの活動でした。まさに先憂後楽(せんゆうこうらく)の立派な姿勢でした。現今のコロナ渦でも医療従事者さんたちの働きが高く評価されていますが、プロの支援者としての凜(りん)とした姿勢から教えられることが多くありました。

### 寄り添うこと

やがて仮設住宅が設置され、私は時間が許す限り、連日、仮設住宅に向いて被災住民さんたちと過ごすようになりました。そこにはさまざまな被災者さんたちがおられました。私ができたことは、ただ黙って頷きながら聴くことだけでした。やるせない気持ち私に向かつて伝えてくる人も多くおられました。皆、自分の辛さを聴いてもらいたいとの思いであふれていました。対人支援の原則である「共感的理解に基づく受容と傾聴」は確かとしても、激しいまでの痛みを抱えておられる人たちの辛さを深く理解できよう筈がありません。私にできることは、ただ傍(そば)に寄り添って、被災者さんの辛さや悲しみを理解しようとするだけでした。以前から「寄り添い・支え合い・分かち合いの福祉」などと言ってきた自分ですが、そのことの意味を実感させられました。

あるとき仮設住宅の集会所にお米の袋が積み上げられていました。みると古古米でした。それを見て涙が出ました。そこで何とか新鮮なお米を提供したいと願い、寄付を募りました。メーカーさんも原価で提供してくださり、結果として、お一人あたり二キロのお米を、合計で五千キロあまり提供することができました。お菓子を食べ、お茶を飲みながら懐かしの歌を唄って過ごす「お茶会」も、仮設住宅が閉じられるまで続け、二百回を数えました。

感謝なことにもそのための必要資金も与えられませんでした。私自身に何か計画性があつたわけではなく、目の前の困難さに懸命に対応するだけの日々でした。

### 原発事故

私は福島第一原発に近い浪江町と飯館村のことが気がかりでした。理由は、仕事の関係で、それまで何度か幼稚園や保育園を訪れたことがあつたからです。「豊かな自然に囲まれた、こんな牧歌的でのかな地域があるんだなあ」と感動しながら訪れてきた地域です。それが突然の原発事故によつて住民さんたちは本当に大変な思いをしてこられました。一ヶ月後に訪れた飯館村で、「牛を連れて避難はできないから：」そう悲しげに語った人の言葉は今でも胸に残っています。その後、浪江町と飯館村の仮設住宅でも、仮設住宅が閉鎖されるまでお茶会を行いました。

かつて私が生活したニュージージーランドもオーストラリアも原発に依存しないエネルギー政策が実現できています。個人のささやかな経験でも原発に依存せずに生活できることを体感しています。あとは国家としての意思決定のみです。原発事故の被害と同じく、今般の新型コロナウイルスによる災難でも、世界中が運命共同体であることを実感させられています。

### 春を待ち望む

私は北海道の田舎で生育しました。大自然の息吹を感じつつ雪を踏みしめながら歩き、小川のせせらぎや小鳥のさえずりを聴き、木々を渡る冷風を肌を感じながらしばしの時を過ごすのが好きでした。大自然に浸るとき、決まっと思いつくのは子どもの頃の冬の情景です。吹雪がごうごうと音を立てて大地を覆ったとき、私はよく外に出て激しい風雪に我が身をさらしたものでした。そんなとき大自然への畏敬の念が沸き上がってきたことを憶えています。「自然を操作してはならぬ。」そうしたまなざしを大自然の息吹から教えてもらった気がするので。そうした北国では、間もなくやってくる春を待ち望みつつ、今は静かにその準備をしています。

私たちも辛いことや悲しいことが続いた場合に、「どうして自分だけ、こんな辛いことが続くのだろう：」と思ってしまうものです。なかなか希望を持ちながら待ち望めないものです。しかし春はまだ遠い、雪深き山々も、やがて雪融けの季節を迎え、雪融け水がサラサラと春の音色を美しく奏(かな)でる時が間違いなく来るのです。

自然も国家も人間も皆、運命共同体として共に在ること。このまなざしを確かにしたい、強くそう思うのです。やわらかな春を待ち望みつつ、日々の歩みをなしたいと願っています。

(尚絅学院大学・名誉教授)